

栃原岩陰遺跡マガジン

TOCHIBARA ROCK shelter site MAGAZINE

Vol.03
2020
March

北相木村の考古学最新情報と
考古学界隈のトレンドを紹介するフリーマガジン

CONTENTS

特集1 誌上で再現?
栃原岩陰遺跡フェスティバル2019は
こんなはずだった!

特集2 『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』とは何か
報告書刊行運動企画①「栃原岩陰遺跡を復元し直す」
②「新たに行った年代測定」

連載 北相木村に呼んでみました
佐々木由香氏(植物考古学者)
考古学リレーエッセイ
中島 透氏(長野県考古学会会員)
北相木村考古学ニュース
学芸員のフィールドノート

令和元年度 北相木村考古博物館報

TOCHIBARA ROCK shelter site FESTIVAL

栃原岩陰遺跡フェスティバル。通称「栃原 ROCK フェス」。連続で4年続いたこのイベント、2019年度は「信州の縄文って、本当にすごかったの？」というテーマのもと、豪華ゲストお二人を迎えての開催予定であった。

しかし、日本列島を襲った台風19号の災害により、これは幻の企画となってしまふ。そこで本号では、この企画に出演して頂く予定だったお二人にインタビューを敢行し、誌上でその再現を試みることにした。

特集1

誌上で再現？

栃原岩陰遺跡フェスティバル2019は こんなはずだった！

栃原岩陰遺跡フェスティバル、通称「栃原 ROCK フェス」。2019年度も例年同様、秋深まり紅葉も美しい10月26日に行われる予定であった。テーマは「信州の縄文時代は本当にすごかったの？」である。昨今の縄文ブームや、信州縄文遺跡への関心の高まりを見直し、その魅力を改めて探ろうというものであった。

しかし一週間前の10月19日、静岡県伊豆半島から本州に上陸した台風19号は、強い勢力のまま北上し、東日本各地に大きな被害をもたらした。長野県でも被害は甚大で、特に千曲流域の佐久穂町、佐久市、東御市、上田市、長野市などでは、大小の河川や千曲川本流が氾濫し、5名の方が亡

くなり、12,000棟以上の住宅が被害に遭うなど、その傷はなお癒えていない。

ここ北相木村も、幸いに人的被害は無かったものの、降り始めからの雨量は500ミリを超え、被害家屋24戸、県道や

村道、農道は寸断され、農地にも多くの被害が出た。村役場、消防団、村民それぞれが、被害の確認や片付け作業に追われた。そしてまだその被害状況も全てを把握出来ないまま、村では26日に予定されていたフェスティバルについて、中止の判断を下した。栃原岩陰遺跡の記念事業通算7回目にして、初めての事態であった。参加を予定していた多くの方から落胆の声が聞かれたが、主催側としても苦渋の判断であった。

当日の講師をお願いしていたのは、片や信州長野県の縄文研究中心地にある博物館館長、片や土偶を軸に縄文の魅力を広く伝える文筆家。どんな話が飛び出すか、主催側も楽しみにしていただけに、悔みきれないものであった。そこで以下では、講師のお2人のご理解を頂き、インタビュー形式で、当日予定していた講演の内容、さらにはこちらからお聞きしたかった質問をぶつけ、本誌上で幻のフェスティバルの再現を試みてみたい。



豊田さん



小松さん

ステージ1

井戸尻考古館館長
小松 隆史さん

まずは、2人の講師に、それぞれ発表頂くはずだった講演の内容に触れたい。最初は井戸尻考古館の若き館長、小松隆史さんである。小松さんは岡谷市で生まれ、大学卒業後は、富士見町教育委員会に勤務、博物館事業や町内の発掘調査などをこなし、現在は同町井戸尻考古館の館長である。

この館について少し説明しておこう。そもそもこの館は、長野県の縄文時代研究の上で大きなエポックとなった「井戸尻遺跡群」の曾利遺跡の上に立つ。南に富士山を遥かに臨み、西は南アルプスがそびえ、北東には八ヶ岳の稜線が並ぶ。傍らには今もこんこんと水の湧く泉もある。この遺跡群の最初の本格的な発掘調査は、1958年であった。調査の指導をした在野の考古学者藤森栄一は、この成果を自身の縄文農耕論の材料とし、以後、本格的な研究テーマとし学界に大きな論争を呼ぶ。井戸尻考古館、そして小松さんは、正にこの大きな流れの中にいるわけである。

ご講演頂くはずだった内容は以下の通り。タイトル「縄文の八ヶ岳」、プロローグ・ここは「栃原縄文人」の里、1.八ヶ岳の縄文文化、2.井戸尻文化とは？～垣間見える八ヶ岳の縄文人、3.日本遺産と黒曜石～八ヶ岳の“繁栄”をもたらしたものは何か、エピローグ・栃原岩陰と山の縄文文化～細い縫い針が語ること。

小松さん曰く、これは「信州の縄文時代は、本当にすごかったのか？」という主催側のテーマにさらに的を絞り、「八ヶ岳の縄文は本当にすごかったのか？」という問いに対する回答ということであった。その中には、既に広く認知されている八ヶ岳近辺の土器や土偶の造形の素晴らしさ、集落の数の多さのみならず、栃原縄文人に学ぶものを含めて考えてみたいということであった。小松さんが栃原岩陰遺跡に対して何を感じていたのかを、今回改めてお聞きした。「井戸尻では常に、縄文人に近づけることを意識して、訪れる皆さんに縄文人の姿が見えるように、感じられるように研究し、紹介することを意識しています。けれど、有機物の残らない井戸尻では不十分。だから僕自身が、栃原縄文人に学ぶことが多いと感じています。海から離れた、山間の岩陰に生きた人々の



井戸尻考古館遺跡群の曾利遺跡の敷地内では、考古館や復元住居がり、その景観と相まって遙か縄文時代に思いを馳せることが出来る。

姿が、見える、感じられる。そんなことが言いたかったのです。

最先端で八ヶ岳縄文文化を探りながら、栃原岩陰遺跡の出土品から、さらに深く縄文世界を探究出来るとお考えのようだ。

ステージ2

土偶女子・文筆家
譽田 亜紀子さん

譽田亜紀子さんは、大学で考古学を学んでいた訳ではない。ライターとして、雑誌などに様々な文章を書くことを続けていた。しかし2009年、奈良県観音寺本馬遺跡出土の土偶を目にし、突然その魅力に取り憑かれたと言う。それからは、土偶を中心とした執筆活動や、各地のイベント、テレビ出演などを通して、土偶や縄文時代の面白さを伝えている、いわば縄文の伝道師である。譽田さんの著作は、既に多くの方に読まれているが、その特徴は、単に目につく遺物を紹介するだけでなく、発掘調査報告書などを紐解きながら考古学的な事象を把握した上で、譽田さんならではの視点で遺物を語るというスタイルだ。だから、誰もが安心して読めるのである。

さて、当日のステージ上では、やはり土偶の魅力を語って頂くはずであった。まずは、譽田流の「土偶の楽しい見方」を紹介してもらい、その後



譽田さんの著作。これから土偶や縄文時代に触れて見た人にもピッタリである。

は信州の土偶の話。例えば「信州の土偶は、他の地域に較べると、何者か分からないものが少ない気がするんです。もちろん、土偶にはいろんな流れや型があるのですが、東北に行くと、問答無用に訳がわからないユニークな土偶がワンサカいるけれど、信州はある程度の型が見える気がする」と言ったような、実に興味深い内容を語って頂く予定であった。

ステージ3

鼎談

次に私たちが出来ること

さて以上を踏まえ、講師のお二人に司会として当館学芸員を加えた鼎談が、最終ステージの予定であった。司会である私の考えていたテーマは、お二人の信州縄文時代への思いとその課題。そこでいくつかの質問を通して、この話を進めてみたい。

信州縄文との出会い まず、信州の縄文との出会いをお二人に伺った。岡谷市出身の小松さんは、家の近くや学校の裏山に縄文時代の遺跡があり、土器や石器を採集することができたそう。そして中学2年生の時、岡谷市湊地区の平山遺跡で採集した遺物を、岡谷美術考古館の学芸員に見てもらったところ「これは縄文時代後期の、諏訪湖で魚を捕る網の錘だ」と教えてくれたことに衝撃を受け、考古学の道を目指したという。

豊田さんは、やはり2体の国宝土偶、すなわち茅野市棚畑遺跡の「縄文のビーナス」と同市中川原遺跡出土の「仮面の女神」が切っ掛けだったとのこと。なるほど豊田さんの著作には、この2体の土偶は度々取り上げられている。その造形美のみならず、同じ地域に国宝たる土偶が2体（全国で国宝土偶は5体）存在している、ここ信州の縄文文化を含めての衝撃だったろうと想像する。

栃原岩陰遺跡について 次に北相木村、特に栃原岩陰遺跡の印象を伺った。小松さんはさすが研究者、以前から知識として知っていた栃原岩陰遺跡の前に「ここが栃原！」という感動がまず第一だったという。そして先の話にも通じるが、充実した遺物と生活の痕跡に感銘を受け、とくに「栃原の縫い針」は、自館での展示解説でもたびたび登場しているそうである。

一方の豊田さんは「当たり前なのですが、人が生きる厳しさを感じます。風雨が凄げるとはいえ、

きつと心細いこともあったらうなど。暗闇。蠢く生き物の息吹。栃原に限ったことではないですが、そうやって人は生きてきたんだと、しみじみ思います」と、彼らの生活に思いを馳せた、豊田さんらしい言葉であった。

お互いに質問 本来当日は、お互いの意見や考えを交換し合う場でもあった。そこで、それぞれに聞いてみたいことを伺い、その回答もお願いした

まずは小松さんから豊田さんへ「日本で一番といってもいいほど土偶を見てきた豊田さん。土偶から「その土偶をつくった人」を感じる事ができる時がありますか？どんなことにそれを感じますか？また土偶づくりから垣間見える縄文人は、どのような人びとでしょうか？」という質問。

これに対して豊田さんは「特に、小さくて稚拙な土偶（あくまで現代人の感覚で）に、縄文人の人となりを感じる時があります。同じ道具で目鼻を作っているのがわかるときや、手のひらの中に粘土を握りながら作っていたと思えた時、あ、こうやって土偶を持ちながら造作していたな、というか。例えば、ハヶ岳系の土偶は、左右で目の高さが違ったり、道具を入れる角度が違ったりします。そんなものを見た時に、作っている様子が浮かび、自分と縄文人が近くなった気がします」と答える。さらに「縄文人ですが、色々いたらうなと思っています。無垢な思いを抱きながら作っていたらうなと思う土偶もあれば、“これは、俺の



井戸原考古館では、富士見町坂上遺跡で出土した国重要文化財の土偶を目にするこも出来る。

技術見てくれ”ってのが出てるなと思う土偶もあります。縄文人たちの個性が投影されていると。ただ、大なり小なり、問題があったり、好き嫌いがあったり、衝突したりしたとしても、土偶から出ているものは「善」だと思うのです。グロテスクなもの多いけれど、それは、作り手の心が反映されて

いる、というよりはイメージの具象化だと思うので。プロテスクだけれど、嫌味がない、暗さがない。そんなふうには土偶は思えるので、基本、縄文人は明るい人だったんだと。笑って、生きることに立ち向かっていく人、って感じかな。悲しみも、苦しみもあるけれど、土偶からは、そういうものをわたしは感じないので」という豊田流の視点を披露。

客観性を求められる研究者としては難しい問題であるが、小松さんは「自分と縄文人が近づいた感覚とか“そういう話が聞きたい”と思っていての嬉しそうですね。いろんな楽しさのなかで明るく生き抜く縄文人。いいと思します」と述べた。

さらに2人は「彼らにとって、人生はあまりに短い。だから、毎日の時間の余裕はあるけど、人生の猶予はないはずなんです。腐って死んでいくのなんて、ある意味、人生に対しての甘えですよね(豊田)」、「ああっ！名言をありがとうございます！なるほど！(小松)」と続けた。

さて次に豊田さんから小松さんへは「自館以外の土偶で、好きな土偶を教えてください」という質問が。これに対し小松さんは、山梨県南アルプス市の鋳物師屋遺跡(有名な円錐形土偶、通称ラヴィではない!)、石川かほく市の上山田貝塚、さらに最近知ったという九州国立博物館で展示されている土偶を挙げ、特に最後のものは、出土した遺跡を豊田さんに聞いてもいる。これに対する確かな答えを述べる豊田さん。まさに「土偶女子」の面目躍如である。

長野県の縄文時代研究がなすべきこと 前述の国宝土偶を含め、信州長野県は日本の縄文研究には欠かせない地域でもある。そこでお二人に、今後の信州縄文研究の役割を尋ねてみた。まさにその中に身を置く小松さんは「ある意味で長野県は縄文研究をリードしてきたと思います。その歴史と新しい成果を融合し、この地域性を大切にしたい研究を進められたら」と堅実な回答。

豊田さんは素直に「むずかしい質問です。ちょっとと思うのは、もっと外に開いてもいいのかな、ということ。研究者の皆さんに対してですが」と。これは私たちに向けられたメッセージとして受け取っておきたいと思います。

TOCHIBARA ROCK shelter site FESTIVAL 2019

信州の縄文時代

は本当にすごかったの？

信州長野県の縄文遺跡や博物館、今、大きな注目を集めています。でも、信州の縄文時代のことで、なにがすごかったの？ 今知れば驚くくらい面白い、土器の作り方も自分づくりに近いものから、そのほかには……

講師 小松隆史さん 講師 豊田聖子さん

10月26日(土)
会場 北相木村中央公民館 考古博物館

★特別講座 (13:30~)
「縄文のハッパー 一冊 伊豆文化の中心舞台」
著: 小松隆史 | 監修: 豊田聖子(考古博物館)

★こどもも特別講座 (14:20~)
「空想絵で遊ぼう! 縄文の土器は、なにがすごいの?」
著: 豊田聖子 | 監修: 小松隆史(考古博物館)

★おもしろ縄文講座
★あんなにアツい土器 (15:30~16:30)
「縄文、信州の縄文時代はすごいの?」
著: 豊田聖子 | 監修: 北相木村中央公民館考古博物館

※参加申し込み不要、定員無制限です。
10月26日(土)の午後に開催される特別講座は定員に達した場合は、抽選で参加者を決定し、抽選結果は当日の朝に発表いたします。
※雨天決行。雨天時は事前発表の予定通りです。ご了承ください。

問い合わせ先: 信州国立博物館 企画・総務課 企画係 0262-77-2111
博物館サイト: <http://vll.khaki.nagano.jp/museum/2019/>
e-mail: kyoukukinai@vll.kitashi.nagano.jp

主催: 北相木村教育委員会
後援: 信州考古学会

信州国立博物館 企画・総務課 企画係 0262-77-2111
博物館サイト: <http://vll.khaki.nagano.jp/museum/2019/>
e-mail: kyoukukinai@vll.kitashi.nagano.jp

事前に配布されていたポスター。全ては幻となってしまったが、また、いつの日か。

北相木村へ 最後に、北相木村への一言を頂戴した。小松さんからは、刊行された栃原岩陰遺跡の報告書(本号特集2参照)を受け、見えてきた栃原縄文人の姿、山間に生きた人びとの生きざまを語って欲しいということ。これについては、本誌も含め、これからの当館の発信を見て頂きたい。

豊田さんからは、今回の無念をまだどこかでリベンジ!ということだった。同じ形では難しいであろうが、是非お2人の来村と、村への生のメッセージを、いつの日か、皆さんにお届けしたい。

追記 未曾有の台風災害でしたが、家屋や道路の清掃作業には、村外からも多くのボランティアの方の参加を頂きました。また寄附金の中には、当館の活動を通じて村を知って頂いた方も複数ありました。その他にもお力添えを頂いた皆さんに、心から感謝を申し上げます。同時に、栃原岩陰遺跡フェスティバルも、多くの人々を結び場として、これからも継続していく所存です。

TOCHIBARA ROCK shelter site FESTIVAL to be continued

栃原岩陰遺跡 発掘調査報告書

第1次～第15次調査（1965～1978）

とは何か

1965年11月23日。興水利雄と新村薫両氏が村を訪れたのが始まりだった。あれから52年。2019年10月、1965年～1978年まで、足掛け14年に及ぶ現地での発掘調査、そしてその後の長い整理作業と研究成果の集大成となる書物が刊行された。それが『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書 第1次～第15次調査（1965～1978）』である。ここでは、発掘調査報告書というものの存在理由と共に、その経緯と内容をまとめてみたい。



1965年12月、発掘調査が始まって間もない頃の写真。

発掘調査報告書とは 日本には約46万カ所の遺跡があるとされるが、工事や開発行為、あるいは学術的な目的による発掘調査が行われ、毎年様々な発見がなされている。但し、ただ掘ったままでは、その成果を誰も知ることが出来ない。後に発行される“発掘調査報告書”というものは、これを第三者に伝える報告なのである

この中ではまず、遺跡を調査した理由や経緯、周辺の地形や地質、またこれまで知られている付近の遺跡の内容などを説明し、報告する遺跡の特徴を浮かび上がらせる。もちろんメインは発掘の内容で、どこを調査したのか、その方法や期間、そしてその結果何が見つかったのか。このような内容を文章のみでなく、写真や図を使って記述していく。こうして初めて、発掘調査の内容が公表される。つまり、発掘調査とは、報告書の刊行をもって完了と言えるのである。

栃原岩陰遺跡の場合 栃原岩陰遺跡は、前述の通り1965年の発見以来、1978年まで現地調査が行われ、12体の縄文人骨をはじめ、数々の土器や石器、多量の動物骨等が出土し、全国的に知られる遺跡となった。しかし、その後調査主体の方々故人となられるなどして、発掘調査報告書が刊行されないままであった。

発掘調査にあたった調査団を引き継いだかたちの北相木村教育委員会では、その後も報告書刊行を目指し出土遺物の整理作業や分析を続けたが、2016年からは国庫補助金を受け、この作業を加速させた。そしてついに、2019年10月、発掘調査報告書の刊行となったのである。総ページ数は468となった。

栃原岩陰遺跡報告書の内容 栃原岩陰遺跡の発掘調査では、およそ7000点の土器片、4700点の石器、12体の人骨、推定12万点の獣骨といった、膨大な遺物が発見されている。この中から特に重要な遺物をピックアップしていく



出土遺物の整理作業は、分類や計測、写真撮影など多岐にわたる。栃原岩陰遺跡の場合は、遺物の種類も数も多く、多大な時間が必要とされた。



図15 1-5号 土器片(15-1)等

113-142は、やや丸みを帯びた成形品で、厚さは1.7mmで、外面は磨削面、内面は粗削り面と推定、成形の内面にまで最大で入っている何となく、輪郭半分以上と推定される。

図14-17などは同一部類で、輪郭半分以上が認められる。114-116、輪郭内の面がほぼ完全に空っぽになっている例。114-117は磨削面と、内面では、焼土粒の上に粘土が厚く塗られておられ、輪郭半分以上が削れておられる。

特徴事例

図15-1は、「下段」出土と思われる、1点のみであるが表面焼土層の残存からなる土製物と思われる。

また本遺跡では、図13でも判じた遺物サイズの上部の底部の可能性もあるが、最初からはミニチュアと推定される資料が数点ある。115-2は、遺物の上部の底部の可能性もあるが、図は小さい。115-3は焼土で、全体の3/4が埋まる。115-4は焼土で、大きく厚く削れたと思われる。115-5も焼土で、焼土と思われる。

報告書の中には、文章のみでなく、岩陰の平面図や、遺物の実測図、写真が掲載され、第三者により正確な情報が伝わるよう努めている。

が、これにはやはり遺物や該当する時代に関する知識が必要とされる。さらに、割愛するものを含んだかたちで全体の情報を整理する必要がある。その上で、必要に応じた図化作業や計測、写真撮影を行う。

人骨については、過去『Anthropological Science』で発表された論考を、一部修正して掲載している。

動物遺体(骨類)については、哺乳類、鳥類、爬虫類・両生類・魚類のそれぞれについて、専門家による分類を経て掲載している。貝類は過去になされた同定に基づき記載した。

また、これまでほとんど手付かずであった、植物遺体(炭化種子など)の検出や掲載にも力を入れた。既に認識されていた大型の遺体の同定に加え、残されていた土層サンプルから水洗選別によって



A4版468頁のボリューム。表紙には栃原岩陰遺跡を代表する遺物である大型の鳥骨(鳥長さ17.1cm)の骨身と実測図、骨身に貼った人骨の出土状況の図をあげている。



21. 海からの侵入品

貝類品が多いのも、栃原岩陰遺跡の特徴の一つ。タカラガイ類、ツノガイ、イモガイ、ハイガイなど、海産の貝を加工している。アオサメの骨も1点出土した。(図録番号208-17、208-12、208-15、210-1、208-3、185-16、208-36、207-20、207-6、208-6)

口絵のカラー部分には、発掘当時の写真や、特徴的な遺物を選んで掲載した。

得られる微細な遺体、また土器に残された種々などの圧痕の調査成果も加えている。

さらには、岩陰という特殊な遺跡であり、土の堆積状況や平面形状も重要な情報であるが、これらについても当時の図面をもとに、出来る限り掲載している。

また、栃原岩陰遺跡では、調査中あるいは調査後に、理化学的な分析も多数なされており、それらの情報の整理と掲載も検討課題とされた。今回は、過去の様々な分析(人骨の同位体比分析など)は研究史の中で紹介し、遺跡の基本理解に必要なもの、具体的には放射性炭素年代測定と蛍光X線による黒曜石の産地同定を掲載した。

今後の課題 こうしたパーツを集めて、一冊の報告書に仕上げた。これによって、栃原岩陰遺跡の内容が明らかになったと同時に、ここまでの成果を、第三者が利用する準備が整ったと言える。今後は、遺物の管理体制を整える必要もあり、それが博物館の役目となる。

そして、ここまでの成果をまとめたことで、新たな謎や課題も生じている。栃原岩陰遺跡の研究は、次のステップに入ったと言えるだろう。

『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』は、北相木村考古博物館入口ロビーでも閲覧可能です。現在博物館では、地域の歴史に触れるための閲覧スペースの整備を進めています。ご期待下さい。

研究成果をどう活かすか

栃原岩陰遺跡を復元し直す もし今展示を作ったら

復元を見直す意味 本号の特集2では、『栃原岩陰遺跡報告書』について、その経緯や内容を記した。その中からは、栃原岩陰遺跡についての新しい見解が見出されている。では、これらの成果を、博物館としてどう活かしていくことが出来るだろうか。ここではその例として、現在博物館にある、人々の暮らしの様子を再現したジオラマ展示を取り上げ、新しい知見でこのアップデートをシミュレートしてみたい。

復元する時期 栃原岩陰遺跡が人々に盛んに使われた時代は、縄文早期の約11,000～9,500年前であるが、少なくとも3つの時期に区分できることを、報告書では挙げた。しかし、上記のジオラマ展示では、これらの時期の物が混在している。

よってまずはその時期を設定する必要があるが、ここでは、豊富な遺物や多数の炉跡が確認されており、岩陰を生活空間として使っていたと思われる「縄文時代早期前葉（表裏縄文土器期・約11,000～10,700年前）」の再現を目指すこととした。

変更点1 人物 栃原岩陰遺跡では12体の人骨が出土しているが、現在のジオラマ展示にある男女成人2体は、このうち早期中葉3（山形・楕円押型文期・約9,500年前）の1号人骨と4号人骨をモデルにしており、特に頭部は頭蓋骨を元に正確に復元されている。今回の再現は、これらをより遡った時期とな



現在の展示をもとに、最新の知見を取り入れるよう試行錯誤。この時点ではまだ細部に曖昧な点もある。

るが、1号、4号人骨に見られる特徴が、およそ日本列島の縄文早期人骨の特徴と一致する点が多いことから、ここから大きく逸脱しないものとした。

変更点2 衣服 該当時期からは、皮なめしに使ったと思われる石器（母指状挿器）が多数出土していること、また骨製の縫針も見られること、さらに小型哺乳類骨の出土量が多いことから、鞣した革をパッチワーク状に縫い合わせた衣服を想定した。

変更点3 犬 栃原岩陰遺跡では犬の可能性のある骨が6点出土し、うち5点が該当時期の層位から出土している。そこで狩りのパートナーとしての犬を配置してみた。他の遺跡の例を見ると、縄文時代の犬は中～小型が多く、顔からマズル（鼻口部）の段差が少ないと言われる。体毛の色はオオカミ犬を参考にしてみた。

変更点4 首飾り 該当時期ではツノガイの出土が多いため、これを主体の首飾りを想定。また、鋸歯状の模様があり穿孔された骨角器を、装身具と解釈し加えてみた。

変更点5 石器 該当時期の石器の特徴の一つが、黒曜石製の小型三角形の石鏃であり、これを矢に装着した。

変更点6 土器 炉に架けられた土器は、該当時期を代表する、やや胴部の膨らんだ表裏縄文土器とした。

変更点7 岩陰の広さ この時期はまだ岩陰内部の面積が比較的大く天井も高いので、人の配置や天井部の加工で広さを演出した。

変更点8 森の様子 該当時期のヤマドリノ骨からは春先から初夏、植物遺存体やサケ属の骨からは、秋に岩陰を使っていた可能性も指摘される。ここでは後者を想定し、季節性を出すため、対岸の樹々を紅葉した広葉樹としている。

展示は変化していくべきもの このように見ていくと、30年前に製作されたジオラマ展示は、個別の再現は優れているが、見直す必要もある事が分かる。より正確な情報を提供するの、今後の博物館の仕事となるだろう。

報告書作成から見てきた学問的成果を、多くの面で活かしていきたい。



研究のさらなる深化

新たに行った 年代測定

なぜまだ測るのか

放射性炭素年代測定とは

「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書」では、都合21点の放射性炭素年代測定の結果を掲載している。放射性炭素年代測定とは、骨そのものや、土器に付着した炭などの有機物に含まれる炭素の放射性同位体である炭素14の減少率から、その有機物が生命活動を終了した年代を割り出すもので、近年ではその精度も増してきている。

その結果、遺跡のおおよその年代はほぼつかめたと見え、栃原岩陰遺跡は約11,000年前～9,500年前が利用されたピークと分かってきた。

そんな中、本年度、北相木村教育委員会では、さらに6点の年代測定を行なった。既に多くの結果が得られている中、なぜその必要があったのか。以下その目的と結果を記しておきたい。

年代測定の意味

栃原岩陰遺跡の報告書作成の過程では、植物遺体の検出を改めて行なった。その中で、特に注目すべき点として、以下の事例があがった。

1. トチノキ未熟果・炭化種子の検出
2. アズキ亜属炭種子の検出
3. 多数のモモ核の出土

1については、トチノキは縄文時代中期、特に後期以降は盛んに利用されたことが分かっているが、本遺跡ではそれを遙かに遡る縄文早期の層位から2点検出された。2のアズキ亜属についても同様で、仮に間違いなく縄文早期のものとするれば、国内でも最古級となる。

3のモモについては、一般的には弥生後期以降に大陸から栽培種が伝来したとされ、縄文時代での存在が確かならば、日本列島の植生史に関わる問題となる。

そこで、これらについて、放射性炭素年代測定を行い、その実年代を明らかにする必要があるのではある。

また、栃原岩陰遺跡では海棲のツノガイが多数出土している。これは縄文早期のいくつかの遺跡でも

確認されているが、その中には化石化した古い遺体の利用が指摘されているものもあるという。栃原岩陰遺跡でも、これを確認する事で、他の遺跡との関係性を紐解くヒントとなり得る。

年代測定の結果

以上のような理由と目的を持って、株式会社パレオ・ラボに年代測定を依頼した。詳しい分析結果は「北相木村考古博物館研究紀要第1号」に掲載するが、以下にその結果の要点を列記する。

1. トチノキについては、分析した1点（未熟果）は現代のものであった。
2. アズキ亜属については、分析した1点（種子）はおおよそ10,700年前のものであった。
3. モモについては、分析した1点（核・種実）は江戸時代もしくは現代のものであった。
4. ツノガイについては、分析した3点全てが4万年を遡るのものであった。

今回の結果から

以上の結果から何が言えるのか。少し説明を加えておきたい。

1のトチノキについては、前述したように、縄文早期の利用が確認出来れば、日本でも最古級の事例であったが、このうち少なくとも1点は現代のものと同判明した。今後はより慎重な論議が必要とされるだろう。また3のモモが近世以降のものであったことは、ある意味予測通りとも言えた。栃原岩陰遺跡では、基本的に古いものが深く新しいものが浅い層位から出土するという原則は認められつつも、モモについては、ネズミ類が地中に貯蔵した結果とも考えられる。

2のアズキ亜属については、分析した炭化種子がおおよそ10,700年前のもので判明したが、これは出土層位的にも年代的にも、これまでの見解である縄文早期前半という認識と一致する。加えてもう1点、-440cm出土の土器の破片に、圧痕のかたちでアズキ亜属の種子が発見されていることも、この時期にアズキ亜属の利用があったことを物語る資料とすることができるだろう。

但し、これをもって縄文早期の人々がアズキを日常的に食していたとは無論言い切れない。それでも、これまで言われていたよりも古い時期から、アズキの利用があった可能性を論ずる、貴重な事例となることは間違いないだろう。



-465～495cmから出土した炭化したアズキの種子。今回行った測定の結果、およそ10,700年前、縄文時代早期のものだと判明した。



ツノガイは30点以上出土しているが、今回の測定で、少なくとも3点が4万年以上前のものであるとされた。

4のツノガイについては、縄文早期の人々が、既に4万年以上前に生命活動を停止していた貝を拾い集めていたこととなる。この成果は、今後ツノガイの産地、つまり当時の人々の行動範囲を考える際の資料に出来るのではと考えている。

未だ未解明である、栃原岩陰遺跡出土の海棲貝がどこから持ち込まれたのか、さらにはそれは海岸までの人々の移動を示すのか、あるいはバケツリレーのように当地にもたらされたのか。その課題に切り込む、新しい一歩と位置付けたい。

北相木村考古学ニュース

富山県に出張？縄文フィギュア富山県朝日町へ

当館ホールで展示中の「縄文人フィギュア」2点が、富山県朝日町のまいぶんKANで展示されました。

北相木村考古博物館には、当館学芸員の作成した1/10スケールの縄文人フィギュア6点が展示されていますが、2019年10月～12月まで、富山県朝日町の埋蔵文化財保存活用施設まいぶんKANの企画展「渦巻きと火焰の縄文土器—あさひの縄文時代—」において、このうち2点が展示されました。学芸員の川端典子さんによると「土器などの遺物のみでなく植生や地形なども研究し、当時の生活を再現する復元画とともに、縄文時代のイメージを来館者に伝えたかった」とのこと。期間中はおよそ464名の方が訪れたそうです。尚、朝日町は大型の竪穴住居址の見つかった国史跡勸堂遺跡や、縄文時代の装飾品でもあるヒスイの産地としても知られています。



写真提供 まいぶんKAN

▲朝日町まいぶんKANの企画展示の様子

今日はこの人

佐々木 由香さん



植物考古学 ってなに？

植物考古学 という耳慣れない言葉ですが、実は今日の考古学では、最もホットで重要な分野。そして栃原岩陰遺跡の理解にも欠かせない研究です。

その研究者の1人である佐々木由香さん。今回は、どんな話が飛び出すでしょうか。



学芸員 F：いつもお世話様です。

佐々木：なんですか、いきなり (笑)

F：いや、栃原岩陰遺跡の植物研究に関してはお世話になりっぱなしで。さて、早速ですが、考古学といえば土器や石器を研究するのが常ですが、植物考古学との出会いはどのようなかたちだったのですか？

佐々木：昔から夏休みになると、田舎のおじいちゃんの家で、野山を巡り花を摘んだり昆虫や魚を捕るのが大好きだったこともあって、考古学でも人々の日常のくらしに興味がありました。土器や石器のことは研究者がたくさんいて、知らないことはすぐ教えてもらったのに対して、植物は研究している人もほとんどいないし、わからないことも多くて、自分で調べたいと思ったのがきっかけだと思います。

F：なるほど。幼い頃の原体験があるのですね。では、佐々木さんといえば「圧痕女子」と巷では言われますよね？要するに土器の中に残された植物の種や虫などを、シリコンで型取って分析

する研究で、数々の功績を上げておいですが、これについて教えてください。

佐々木：え？言われているの？

圧痕は、土器が焼かれる前に粘土に入った有機物の痕跡なので、土器作りの際にまわりについて偶然入った生活のゴミや、粘土の中に意図的に入れた物がわかります。土器の圧痕には人間が関わった植物利用が反映されやすいのが魅力です。しかも、日本の土器型式の編年は精緻なので、土器の時期がわかれば入っていた圧痕の時期もわかります。

F：なるほど。それで先史時代の植物利用について、次々に新見解が出てくるのですね。



栃原岩陰遺跡の出土炭化物に見入る佐々木さん。この後、様々な発見が生まれます。

栃原岩陰遺跡から出土した炭化種実

又、最近はカゴの研究もされていますが、縄文時代にはどんな物が作られていたんでしょうか？

佐々木：現代と変わらない、カゴやザル、敷物が確認され、それが縄文時代早期（栃原岩陰遺跡の後の時期、およそ8,000年前）にはフルセットで揃っています。技法も、早期後半には現代につながる基本形が揃っていることがわかってきました。カゴは作るよりも、その材料を整えるのが大変ですが、早期には材料となる植物を相当管理・選択して、カゴづくりに適した材料を選んでいたこともわかってきています。

F：これまで土器や石器しかイメージしにくかった縄文時代ですが、カゴやザルが加わると、なんだかグッと身近な感じがします。では、ここ長野県では、植物考古学でどんな事が言われていますか？

佐々木：長野県は、縄文農耕論をはじめとして植物利用に昔から関心が高い地域だと思います。住居の中の土を水洗して、目には見えない小さな炭化種実を検出したり、炭化した種実の塊の成分をいち早く調べるなど、植物考古学の関心が高い地域です。最近では、縄文時代中期（約5,500～4,500年前）に大きなダイズやアズキ、栽培種であるエゴマサイズのシソ属の土器圧痕が多く見つかり、それらが栽培されていたのではないか、いつからどこで大きくなったのかといった研究が進んでいます。

F：佐々木さんも参加された栃原岩陰遺跡の調査でも、色々な植物遺体、種実圧痕が見つかりましたが、これらはどんな意味をもっていますか？

佐々木：標高900m以上の縄文時代早期の遺跡ということで、これまでみたことがない圧痕や種実がたくさんあるのではないかと考えていたのですが、意外と!?平野部の遺跡と同じ種類が多かったのに驚きました。また、中期に大きくなるマメ類の祖先野生種であるツルマメやヤブツルアズキのサイズの圧痕が見つかったりと、人



土器の中に隠された植物種子の圧痕を探す。実に楽しそうな表情です。

間が約1万年前にどのような植物を資源として見出していたか、利用し続けたかを考えるヒントをくれたように思います。

F：栃原岩陰遺跡については、今後もお世話になるかと思いますが、その他、今後調べてみたい事はありますか？

佐々木：当時たくさん食べていたと思われる山菜などの青物、球根など、これまで柔らかくて遺跡では残らないと言われていた植物です。

F：山菜、美味しいですね。北相木村の春の味も是非。では最後に、その北相木村への提言を。

佐々木：栃原岩陰遺跡は、土器や石器、骨角器、動物遺体だけでなく、炭化種実や土器圧痕種実も調べられていて、学際的な研究を北相木村が主導して行っているところがすごいと思います。ぜひ、こうした学際的な研究を続けていただいで、まだ調べられていない炭化した植物、炭化材の樹種などからも植物利用についてアプローチしていただきたいです。

植物考古学の未来を切り開く佐々木さん。これからもぜひ、山間部の貴重な事例として、栃原岩陰遺跡をお願いします！
山菜もぜひ。

考古学とスキー

～山とスキーが藤森栄一を生んだ～

今シーズンは記録的な暖冬で、各地のスキー場が雪不足だというニュースが話題でした。筆者の住む諏訪もほとんど降雪はなく、八ヶ岳もいつものような雪をまとった美しい姿とはほど遠かったように思います。反対側の佐久の皆さんから見ても同じでしたか？

さて、スキーというのはとても長い歴史があり、ヨーロッパでは4,500年前の洞窟壁画にスキーをはいた人とされる絵があるほか、スキー板の出土例もあるそうです。初めは狩人が雪上をスムーズに移動する手段として用いられたようですが、その後軍隊で導入されるようにもなりました。スポーツとしては1700年代から北欧で始まり、現在ではウィンタースポーツの定番として世界中に愛好者がいます。

日本では、明治44年(1911)にオーストリアから来た軍人・レルヒ少佐が新潟県高田の歩兵第58連隊で講習会を開いたのが始まり(スキーの道具自体はそれより前に日本に入っていたようです)とされ、その翌年には長野県でも高田でのレルヒの講習を受けた人たちによって始まりました。



スキー場での藤森栄一(後列左)。ちなみに隣りは筆者の祖父。親しい友人の一人だったとのこと。

それ以降、県内各地にスキー場ができ、スキーヤーが増えていきました。

諏訪出身の考古学者・藤森栄一(1911～1973)も、スキーを愛好した一人でした。若い頃の日記には頻繁にスキーのことが登場し、何日も山に入ってスキーを楽しんだ様子が書かれています。また、地元のスキー大会で優勝もしています。藤森の師匠にあたる考古学者・森本六爾(※1)や、同志の小林行雄(※2)との手紙の中でもスキーの話題が出てきて、その熱中ぶりに森本も小林も時にはちょっとあきれ気味?な反応を示しているのが何ともご愛嬌です。ただ、藤森がスキーに熱中した背景には、旧制中学卒業後、家業を継ぐために考古学の研究が思うようにできなかったジレンマもあったようで、悩み多き青年時代の一側面も垣間見えます。でも藤森はスキーや登山を通じて山への造詣を深め、山と考古学を融合させた一文を発表していますから、その学問形成にスキーが間接的に影響を与えたと言ってもよいかも知れません。

ところで、藤森が滑ったのは地元の霧ヶ峰で、ご存じの通りなだらかな斜面が続くこの高原はスキーの格好の適地として人気がありました。霧ヶ峰でスキーが発展した契機は昭和7年(1932)。藤森の述懐によると、この年は今シーズンと同じように雪不足で、各地のスキー場が匙を投げる中、霧ヶ峰には十分な積雪があることが報道されて一挙に霧ヶ峰が注目されました。このとき諏訪スキー倶楽部員として霧ヶ峰に登り、そのことを確認した一人が藤森でした。これを受けて当時の諏訪町(現在の諏訪市)はスキー環境の整備に力を入れ、翌年から大都市圏から多くのスキー客を迎え入れます。以後霧ヶ峰は長野県を代表するスキー場の一つになったのです。

ちなみに、昭和15年(1940)の第5回冬季オリンピックが日本で開かれることになり、その会場と

中島 透

Nakajima Toru

して全国の6ヶ所が候補になりました。そのうちの4ヶ所は長野県内で、その一つに霧ヶ峰もありました。上諏訪町も誘致に力を入れ、ドイツで開催された第4回冬季大会に人員を派遣するなどしましたが、結局札幌に決まりました。しかし日中戦争のため、夏季の東京オリンピックともども返上することになり、幻のオリンピックとなりました。今年の東京オリンピックが延期になったことが大きな話題となりましたが、80年前にもこんなことがあったのです。



現在の八ヶ岳山麓のスキー場。
遠くには浅間山が見える。冬、縄文人はどんな時間をすごしたのだろうか。

そういえば、 日本列島の原始・古代の人々は、雪の上を滑るということをしたのでしょうか？「そり」なら、必ずしも雪上ということではないですが古墳時代に巨石を運んだと思われる「修羅」が出土していますから、何らかのものはあったかも知れませんが、人間が装着したものとなるとどうでしょうか。北欧のように実際の遺物が出土していないので何ともいえませんが、八ヶ岳の裾野などは広大ですから、そうした道具があったらなかなか便利な気がします。「縄文農耕論」など多彩かつ大胆な研究で

知られた藤森だったらどう考えたのが、ちょっと興味が湧きます。栃原岩陰遺跡の北相木人も、雪の深い冬は縄突と雪上を滑っていたかも、なんて考えるとちょっと楽しいかも知れません。

※1：森本 六爾 (1903～1936)

東京考古学会を設立し、在野で活躍した考古学者。弥生時代の水稻農耕の存在を主張し、日本の弥生時代研究に大きな影響を与えた。

※2：小林 行雄 (1911～1988)

藤森とともに森本の東京考古学会に参加。のちに京都大学で主に弥生・古墳時代を研究する。弥生土器や三角縁神獣鏡の研究が著名。



中島 透 (Nakajima Toru)

1974年、諏訪市生まれ。幼い頃より地域の歴史に興味を持ち、明治大学で考古学を学んだ後、諏訪市役所に就職。教育委員会の各所を歴任する中で、諏訪市博物館学芸員として、地元諏訪市の考古学者藤森栄一資料の整理や、最新の科学で地域の資料を理解する展示を手掛けつつ、諏訪市の歴史研究を推し進めた。また学生時代には、これまで諏訪市域では例の無かった、旧石器時代の“細石核”を発見している。実家は老舗和楽器店を営み、本人も数々の楽器演奏をこなす。

北相木村考古博物館研究紀要について

北相木村考古博物館では、2020年より「北相木村考古博物館研究紀要」を刊行することとなりました。

本誌でもお伝えしている通り、北相木村教育委員会では、これまでの栃原岩陰遺跡調査の集大成となる「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書 第1次～15次調査(1965～1978)」を刊行しましたが、調査研究に終わりはありません。そこであらたに「北相木村考古博物館研究紀要」という本を毎年発行し、栃原岩陰遺跡の更なる研究成果を発表していく予定です。今後ますます深まる研究に、ご期待ください。

北相木村考古博物館研究紀要
第1号

北相木村考古学ニュース

北相木村
考古博物館研究紀要
第1号



2020
北相木村考古博物館

学芸員のフィールドノート

元号が平成から令和に替わった2019年度。今年は当博物館にとっても、様々な出来事がありました。まずは、冒頭の特集に書いたように、これまで4年間継続して行ってきた「栃原岩陰遺跡フェスティバル」が、台風19号による災害で中止になったことです。さらに2月末からは、新型コロナウイルスの感染拡大の予防と、急な休校要請への人員的な対応もあり、博物館も臨時休館という措置を取らざるを得ない状況となりました。本場に過酷な一年であったと言っても過言ではありません。

そんな状況でしたが、悲願であった「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書 第1次～15次調査(1965～1978)」が刊行できたことは、今後への光明でした。多くの方々にお力添え頂きましたこと、心から感謝を申し上げたいと思います。

実際の発掘調査に携わってきた方の多くが故人となっている今、その方々の思いは如何なるものか知る由はありません。この報告書をもし見たら、笑うか怒るか、どちらでしょうか。

いずれにせよ、この報告書をたくさんの方々、中でも次の世代の研究者に活用してもらうこと、そのための活動も、本館の新たな使命と考えています。何が出来るか、何をすべきか、模索と実践は続きます。

北相木村考古学博物館学芸員 藤森 英二



北相木村考古博物館

〒384-1201
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ 0267-77-2111
<http://vill.kitaaki.nagano.jp/museum/>

令和元年度 北相木村考古博物館報
栃原岩陰遺跡マガジン vol.03
令和2年3月刊行

企画編集 藤森 英二
(北相木村考古博物館学芸員)
発行 北相木村教育委員会
印刷 中澤印刷株式会社